

班での話し合いで自分の考えが相手に伝わるような発言を促すための試み

～自分の考えを整理することができるための手立ての工夫～

所属 教育学研究科 高度教職実践専攻

氏名 吉田 彩華

1. X市立Y校の現状と対象とする児童の課題

実践者が実習を行わせていただいているX市立Y小学校では、アクティブラーニング型学習に分類できる子ども司会型学習という学習形態がとられている。その学習形態では児童がこれからの時代に求められる力の育成を図って、協働的な学習が行われている。しかし、実施学級の児童の中には、班での話し合い活動の際に、自分の意見を表明することはできるが、相手に伝わるような発言をすることが難しい児童がいる。

2. 先行研究

先行研究によれば、相手に伝えるような発言ができないのは、考えがまとまっていないからとするもの(山口, 2017)や、考えを整理するためには、思考ツールが有効とするもの(田村・黒上, 2017)がある。

3. 研究目的

これらのことから、この研究では、班での話し合い活動において自分の考えが相手に伝わるような発言をすることが難しい児童に対して、思考ツールを組み入れたワークシートを使用することを「手立て」とし、その結果、発言の深まりがみられるかどうかを検証することを目的とする。

4. 課題解決の方法

課題解決の方法として、児童2名(B児・C児)を対象児として選定し、「手立て」を取った道徳科の授業を2回実施する。

実践の評価は、ワークシート(以下「W. S」とする。)の記述内容、その記述内容と班での話し合いの発言内容の関連性、そして質問紙調査により行う。

5. 結果と考察

①「手立て」を取り入れる前後のW. Sの記述内容比較

B児は、「手立て」を取った後の記述には、理由づけを行うように変容している。C児は、記述内容に変容がみられなかった。

②「手立て」を取った2回のW. Sの記述内容の比較

B児は、第2回目では、第1回目と同様に相手の気持ちを書いているが、それ以上に自分がその立場に立った記述ができています。C児で同様の比較をすると、登場人物の心情を読み取りから、それぞれの立場を踏まえた意見を持つことができています。

③W. Sの記述内容と班での話し合いの関連性について

B児は、W. Sの内容を反映した発言並びに「深い処理」がされている発言をする回数が第1回目と比較して2倍以上に増加した。これらの結果からB児には、一定の効果があつたと考えられる。

C児で同様の比較をすると、第1回目と比較して減少した。しかし、第2回目では、B児、C児がW. Sの内容を反映した発言並びに「深い処理」がされた発言を互いに交わすことができるようになっている。

C児には、今回の「手立て」だけでなく、ほかの手立ても併用する必要があるだろう。

④質問紙調査について

質問紙調査では、対象児の意識としては、有効的であると答えていた。学級全体の児童への質問紙調査でも今回の「手立て」を取り入れたW. Sを使ったことは効果的であったという意見が大半を占めており、児童の意識としては今回のW. Sは活用しやすかったということが考えられる。

これらを踏まえて、児童の実態や発達段階にあわせた思考ツールを組み入れたW. Sの有効性を念頭に置き、実践者が教員となった際にも実践の手段の一つとして取り入れるなどして励んでいきたい。

〈参考文献〉

文部科学省(2017) 小学校学習指導要領 総則

田村学, 黒上晴夫(2017) 『「深い学び」で生かす思考ツール』小学館

山口謙司(2017) 『頭の中を「言葉」にしてうまく伝える。』ワニブックス